

子どもとメガネ雑感

金井 崇

眼鏡店には色々な目的をもった御子様方が御来店になります。大別してみますと、家族の方のメガネの御用の御供としてついて来られる場合と御本人が装用もしくはこれから装用しようとしての場合と二通りあります。一般的にみますと、前者の場合は比較的陽気に振舞い、メガネ枠やサングラスを玩具の一種のようにみなしているように思われます。「ママ、それカッコいいよ!」とか「バンドみたい!」などとすぐれた批評家になることもあります。ところが傍観者でなくて自分自身が装用者である場合には、多分に態度が違ってまいります。メガネ本来の役割は医療用具の一種で、眼の屈折異常の矯正を目的とするものなのですが、この本来の使命を本能的にキャッチしてメガネに対して、ある種の恐れを抱くのでしょうか、或いはこのメガネをかけた自分を見て、友達は何て言うだろうかなどと幼ない心を痛めて気が重くなる為でしょうか、後者の場合は比較的神秘的態度でメガネに相對しま

す。

約三年程前のことですが、当時六歳の女の子が母親に連れられて来店され、テレビを見る時、画面に近づけばかりでなく、画面に対して真正面に向わずに斜めに向き、そして横目づかいで画像を見ているということで相談に來られました。早速検査してみますと強度の乱視が検出されましたが、何分にも年齢が低いので即断を避け、幸いなことに私の弟が眼科医であるので、弟に精密検査を依頼しましたところ、同様の結果を得ましたので、そこで初めてメガネを作りました。でき上ったメガネをかけて物がよく見えると喜んで帰宅されましたが、一か月とたたないうちに再び来店され、そのメガネをかけて幼稚園に行くとお友達から「メガネザル」と言われてひやかされるので幼稚園にかけて行くのは絶対に嫌だというので、何か他によい方法はないだろうかと相談されました。そこで再び弟と相談の結果コンタクトレンズ装用にふみきり、その御子様はそれ以来現在に至るまでずっとコンタクトレンズを使用されております。このようなケースはしばしば耳にしておりますが、このお子様の場合は御母様が眼に対する理解度が大きかったので最上の方法で解決することがで

きましたが、一般的にみまして、我が子にメガネをかけさせることを躊躇なさる親御さんが大変多いように見受けられます。特にそのお子様が女子である場合はその気持が強くなるようです。眼科の先生方の御話では近視も遠視も乱視も皆眼病の一つだと言われます。するとメガネはその特効薬と言えましょう。頭が痛いとかお腹が痛いと言えば、すぐに病院に飛んで行かれますが、どういうわけでしょうか、物がよく見えないと御子様が訴えても、できればメガネはかけさせたくない」と願う親御さんが多いのは誠に残念です。

田宮虎彦氏は『愛するということ』という著書の中で、若い女の人の中には眼鏡をかけることを嫌がる人がいる。色々なカラーの眼鏡枠それ自体は美しいアクセサリーとさえ言える程なのに、それをかけるとその人の顔の美しさが消えてしまふのだろうか。もしたとえそのために美しさが消えるにしても、物がはっきり見えるならば眼鏡はかけなければならぬいだらうと言っています。見えない眼で物を見るのと、メガネをかけてはつきり物を見るのとどちらがよいかは自明の理です。この雑誌をお読みになられるのは教育にたずさわられる方々ばかりと思いますが、この誌上をお借りして御願ひした

いことは、早いうちに屈折異常の御子様を発見して、その御子様のハンディキャップをできる限り早く取り除くようにしてあげて頂きたいことです。つい先頃のNHKテレビで帝京大学医学部の丸尾教授が「子供と遠視」という演題で御話になっておりましたが、御両親、学校の先生への御願ひとして、

一、テレビ、本を近くで見る子

二、細かい仕事、勉強に根気がない子

以上二つの点に気がついたらすぐ専門の医師に相談して精密検査を受けるようにと警告されておられました。すでに十分御配慮なされておられることでしょうが、是非これらの点に御留意頂き御子様方の視生活にも目を向けて頂きたく重ねて御願ひ申し上げます。

最後に最近店頭で伺ったある御母様の言葉を御紹介して終りにさせて頂きます。小学校一年生と二年生の男児御二人を連れてその兄弟のメガネを求めに來られた方ですが、でき上ったメガネを兄弟にかけさせて、「このメガネはお前達目なんだから大切にしなさい」とおっしゃいました。

(眼鏡店経営)